ミニマム・ソーサラー(仮)

猫叉木三太夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミニマム・ソーサラー（仮）

【Ｎコード】
Ｎ３０５７Ｚ

【作者名】
猫叉木三太夫

【あらすじ】
科学よりも魔法が進んだ世界。
魔力は、血液中の魔法誘導因子の濃度で決まり、それを効率よく活性化させる技術を学ぶ魔法学校に通う少年少女たちのジュブナイル。
先々、グロ表現有り。
ちょっとインモラル設定も。

第一話（前書き）

造語てんこ盛りで進行中。
用語解説は今後の話中で行う予定です。

第一話

両手を天に突き上げ、反射的に使ってしまったソレに気が付いた時、七瀬沙耶（ななせ さや）は、眩い光の中で、自分の迂闊さに青ざめた。

沙耶は、クリスマス前という事もあって大勢の人で賑わうショッピングモールへ、学校帰りに友人と二人で遊びに来ていた。
二人が吹き抜けホールに差し掛かったその時、沙耶の直上の天井が爆発音と共に壊れて、大小のコンクリート片が降ってきた。

咄嗟に直上方向に、全力で“反射”防御陣を展開してしまった。
最近、学園で練習している防御陣で、識意識外領域に常駐させていた為に、咄嗟に出てしまったのだ。
自己防衛からすれば当たり前の反応だったが、これから自分が引き起こす惨劇を想像した。

展開してしまった“反射”属性の防御陣は、接触した全ての物を展開防御陣に対して反射する。
しかも、全力で展開してしまった為に、三倍反射の属性を持っている。
落下してきたコンクリート片は、落下速度の三倍の速度に加速され、撒き散らされ、対人地雷を炸裂させた有り様になるはずだ。
周囲にいる大勢の買い物客達が、大小のコンクリート片でバラバラに引き裂かれる光景が脳裏に浮かんだ。

自分を中心に激しく発光する魔法反応光（エーテルライト）の中、パニックになりながらも、防御陣を解除しようか迷った。
それでは足元にうずくまる友人をも危険に曝す事になる。
他に出来る事は無いのか考えようとしたが、時間は無かった。

これから自分が引き起こす惨劇から逃げるように目を閉じようとした刹那、奇妙な感覚に囚われて、ふと目をやった。

ホールの隅に置かれた、クリスマスツリーのオブジェの陰に立つ男子がいた。
無造作に切られたふわりとした黒髪。
身長はそれほど高くない。
全体的に細っそりとした感じ。
自分と同じ学校の制服を着ている少年。
こちらに軽く手を突き出し、目を瞑っている。
顔は・・・よく見えない。
何か魔法を使おうとしているようにも見えるが、杖は持っていないし魔法反応光（エーテルライト）も発生していない。
しかし、沙耶は、何故か少年が魔法を使っている事を、確信を持って理解していた。
目を上に向けると、落下してくるコンクリート片が、ゆっくりと速度を落とし、防御陣に触れる直前でベクトル方向を変えて、防御陣を避けるように床に落ちていく様が見えた。
全てのコンクリート片が床に落ち、わずかに舞い散る埃が光を反射して粉雪のように光って、シュールで幻想的な光景を作り上げていた。

「助かりました！　有難うございます！　沙耶さま！」
一時の空白の後、足元にうずくまっていた友人は、涙を浮かべて沙耶に取りすがって、感謝の言葉を述べた。
沙耶自身も気が付かないうちに、防御陣を解除していて、魔法反応光（エーテルライト）も消えていた。
予想外の結末に、沙耶は茫然自失し、友人の言葉を否定するのも忘れて、先ほどの少年を探して視線を泳がせたが、もうすでにその姿を見つける事は出来なかった。

周囲からの賛美の声と視線を感じながら、沙耶は、意識を闇の中に手放した。

杖も触媒も無しに、全力で防御陣を展開した反動からか、直後に気を失った沙耶は、そのまま病院に搬送され、目覚めたのは翌日の昼過ぎだった。

その間に、“ショッピングモールでのテロ事件で、見事な魔法操作をもって惨事を防いだヒロイン”として周知されていた。

もともと学園でも高く評価され、過剰に賛美される事も多い彼女だったが、自分のミスを他人に助けられ、しかもそれが自分の手柄として評価されている。

それは彼女自身にとって非常に不本意な事だったが、状況的にそれを否定できないために、なし崩しにその評価を受け入れざるを得なかったことが更に彼女を苛立たせていた。

（絶対に、あの男子を見つけてやるわ！）

沙耶は、ベッドの中で、心に硬く誓ったのだった。

第一話（後書き）

いろいろ突っ込みドコロ満載だと思います。
遠慮無くツッコミお願い致します。
誤字脱字修正指摘も大歓迎です。
よろしくお願い致します。

随時、加筆修正中。

第二話（前書き）

主人公登場。
腹黒ショタ風。

第二話

「はぁ・・・やっぱりマズかったよなぁ」
幡舘逸朗(はたたていつろう)は、大きな溜息を吐(つ)いた。

国立魔法学園高等部の一年生の制服に身を包んだ少年は、時代錯誤な濃紺の学生服に【M－1】と刻印された金バッジというデザインの制服に完全に負けていた。
気弱そうな風貌に、薄い身体、無造作にカットされたふわふわヤワヤワな黒髪。
ともすれば中学生どころか小学生に間違われかねない。

ショッピングモールでのテロ事件の翌日、一日の全てのカリキュラムを終えて、帰宅するべく廊下をトボトボ歩きながら、もう一度、本日何度目になるか判らない大きな溜息を吐いた。

（でも・・・）
と、心の中で言い訳をする。
（あの場で対処出来たのは恐らく自分だけだったし、あのまま放っておいたら大惨事になって彼女の心に大きな傷を作る事になってただろうし、たぶん誰にもバレてない筈だし・・・）
それにしても、と事件の事を思い起こして考えに耽る。
（偶然・・・にしては出来過ぎだよなぁ。かといって彼女を狙ったにしては計画が杜撰(ずさん)過ぎだし・・・。何か別の意図が？）
とか考えながらうつむいたまま歩いていたせいか、ポフッと何かにぶつかった。

「あ。ゴメンなさい」
何にぶつかったかも確認せずに、反射的に謝りながら、頭を下げた。

「あぁ？何だぁ？お前、“最低限(ミニマム)”の幡舘じゃねーか」
逸朗の頭上から、あからさまに人を見下した声が降ってきた。
（嫌な奴に会っちゃったなぁ）
と内心で顔を顰めたが、実際には愛想笑いを浮かべて声の主を見上げた。
小柄な逸朗と比べると大人かオッサンかと見紛う男子生徒だった。
時代錯誤の学生服が、逆に似合っている老け顔に侮蔑の態度を隠そうともせず、逸朗を見下していた。

「大石くん、ゴメンね。ちょっと考え事してて」
大石と呼んだ男子生徒に、逸朗はもう一度頭を下げた。
自分に阿(おもね)る態度に満足したのか、ニヤリと笑うと、逸朗からは大石の巨体で隠れて見えない位置にいたヒョロリとしたキツネ顔の男子生徒に向かって、馬鹿にするように逸朗を紹介した。
「コイツがあの“最低限(ミニマム)”幡舘だよ。魔法遣(ソーサラー)いとしちゃ最低限のハナクソみてーな魔力しかないクセに、学費免除の特権欲しさに、いじましく魔法実技科にしがみつく寄生虫みたいなヤツさ」
癇に障る声で、逸朗を侮辱する紹介をして、ケケケと笑う。
キツネ顔の男子生徒も、大石さんと比べちゃ可哀想ですよ、などと大石を持ち上げる追従(ついしょう)を口にして、ヘラヘラ笑った。
逸朗もハハハと乾いた笑いを口許から発して、誤魔化すように立ち去ろうとした。
が、大石は逸朗の肩を掴んで、引き留めた。

「待てよ。お前、昨日のテロん時、ショッピングモールに居たそうじゃないか」
「あ。ウン。本屋さんに用事があって・・・」
逸朗は、内心ギクリとしたが、素知らぬ風を装って、曖昧に答えた。
「現場の近くに居たんだってな？」

グイと肩を引き寄せ、大石が耳許で唸るように囁いた。
（何でそんな事を？・・・まさか）
逸朗は、あの時の事を見られていたのか、と心配になった。
見られていたのなら、どうにかしなくてはならない。

「この黒田が、ウチの制服着た小っちぇえ男子生徒を見てんだよ。なぁ？」
「そうです。そうです。このチビですよ。後姿だったんで顔は見てないっすけど、ホールんとこでツリーに隠れてコソコソしてやがりました。間違いないっすよ」
黒田と呼ばれたキツネ顔の男子生徒が、鬼の首を取ったように喜んで、大石に報告した。

（誰がチビだよ。このキツネ野郎。キツネとゴリラでワクワク動物園か！）
逸朗は、心の中でイラッとしたが、イヤイヤ違うだろ、と思い直した。
（後姿という事は、あれは見られていないな）
動物園コンビをどうにかするのは望むところではあるけれど、余計な仕事が増えるのは避けたい。
とりあえず、大石の話に合わせる事にする。

「たまたま見かけただけなんだけど・・・。
それが？」
素知らぬ風に答えると、大石は急に顔を赤らめ、口籠った。
キモッと思いつつ、言葉を待っていると、ボソボソと話し始めた。
「お前、な、七瀬さんが活躍してるとこを見たんだろ？ど、どんなだったか？」
モジモジしながら話す大石の様子を見て、気持ち悪いと思ったが、

なるほどそういう事かと判り、どうしたものかと考えた。
仲良くする必要もないし、適当に答えておくか、と決めた。

「う～ん。僕もビックリしちゃって目を瞑っていたから、よく見てないんだ。役に立たなくて、ゴメン」
「う・・・。そ、そうか」
「黒田くん？だっけ。僕の後ろから見てたなら、黒田くんのほうがよく見えてたかも？」
そう言って、また頭を下げてから、黒田のほうに話を振ると、その事に思い至ったらしく、黒田に向き直り、何か見てないのかと詰め寄っていた。

じゃあ、また明日。と小さく言って、逸朗は、大石達が話している所から立ち去ろうとした。

「見つけたぁぁぁ！！」
甲高い女子の声が、廊下に響き渡った。

第二話（後書き）

男子生徒は学生服。
女子生徒はセーラー服です。
時代錯誤でダサいと生徒達からは、大不評。

第一話で、女子生徒のセーラー服の描写を入れるか迷いましたが・・・

誤字脱字修正アドバイス、何でも大歓迎です。
よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3057z/

ミニマム・ソーサラー(仮)

2011年12月11日22時52分発行